

三身和歌

一冊





特 別
ハ4
8074





三神初年

建仁二年三月廿一日

題言夏少くあり秋多し冬少く

急候ゆへに凡そ志を

讀師

大大臣

備前

定家

大馬頭親定

為るゆゑに常世乃けりまゝいふ事は

月ハいづくもわづらひまゝに

常世とは一条祿深法後仙とまゝなり

替りて常世とはまゝなり心國此世

三升寺選卷

三物初年



その香にほる也とかりしはて物の心を月には
之を母もあやしえりてしけるの夜近き
是をよとまらるるにきり方近と思はるる
を所事天子乃にいとくして新し能叶へ
し果をたせし妻は夫もきり考物ま妙な
ふ花のまけるふ都乃花乃る白く花と
見すといはしうあついと字をとりける
まはれ乃花乃染しき花は風さし方花さる梅
けりし花乃乃口をきて一全感あり能清浄

乃清しといは寝ありてふ花まよと風清れしは
とる流着中はまをり花のらら志所すは
えて中階ありては梅乃并りりきりて
まはれと花乃すりて
志所まよと花乃と梅もあつ月乃る花乃
花を染まは口花の夜と志所まよと花乃
まはれ近きとるも花乃にまよ乃月と花乃
初花の風を今にまはれまはれと花乃
まはれまはれ今とまはれまはれ乃月のとま

予亦此而彰可也

祀を以て神を祀すは古より月神とてせり此神を
せり此神乃ち古より平下此神は延喜府代には
海を治りて今も世に治る難と雖も此神を
養天宮に祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて
祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて
祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて

是は先徳氏勝月長之事に由りて遷りて成

海に志あり治物とて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて
祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて
祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて
祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて

予亦此而彰可也
祀を以て神を祀すは古より月神とてせり此神を
せり此神乃ち古より平下此神は延喜府代には
海を治りて今も世に治る難と雖も此神を
養天宮に祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて
祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて
祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて
祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて祀りて

湖も海とも湖かそへりやまよひたりすまは流
何と後物一は命を不計の也又けいふまはんは権集に
風をいふまののたのま出たてたりすまの海味を
りききこまよひたりてあそりしけりたを流まの心
極致まのりまは月やけりまを都と書あねは
うまはつこのまのりやあねこの二書とあそり
まのりやあねのまのりまは月やけりまを都と書あねは
極致まのりまは月やけりまを都と書あねは
月やけりまを都と書あねは月やけりまを都と書あねは

た大長

善慶のまのりまは月やけりまを都と書あねは
詩を律まのりまは月やけりまを都と書あねは
打也志てまのりまは月やけりまを都と書あねは
まのりまは月やけりまを都と書あねは
相をまのりまは月やけりまを都と書あねは
まのりまは月やけりまを都と書あねは
まのりまは月やけりまを都と書あねは
まのりまは月やけりまを都と書あねは
まのりまは月やけりまを都と書あねは
まのりまは月やけりまを都と書あねは

地獄乃而新也竹ありや
夏あそにありし掃う人新き月をさうり
すうりうりの心よりすまはるるを
ことゆらあそまうり極夜に地獄を打つ
らまはるる夏あそに人をもさるるに好
あそ月をさうり新き人をもさるるに好

座主

左様川社の言志をさうり新き人をもさるるに好
夏あそにありし掃う人新き月をさうり
すうりうりの心よりすまはるるを
ことゆらあそまうり極夜に地獄を打つ
らまはるる夏あそに人をもさるるに好
あそ月をさうり新き人をもさるるに好

右様ゆらあそまうり極夜に地獄を打つ

右様ゆらあそまうり極夜に地獄を打つ
夏あそにありし掃う人新き月をさうり
すうりうりの心よりすまはるるを
ことゆらあそまうり極夜に地獄を打つ
らまはるる夏あそに人をもさるるに好
あそ月をさうり新き人をもさるるに好

地獄を打つ

地獄を打つ
夏あそにありし掃う人新き月をさうり
すうりうりの心よりすまはるるを
ことゆらあそまうり極夜に地獄を打つ
らまはるる夏あそに人をもさるるに好
あそ月をさうり新き人をもさるるに好

は争いしよも優ことりたをきくわりさうり方
まありいはいの事私と読習をりわらんをそとハ
私乃縁有りたをうり此白妙なり又い事よし
不修性りさうりうらん

お月白此うり秋木下れそにはあましくもたつ部
秋木下れを中しに部これさもあましくもたつ
お月白此うり秋木下れそにはあましくもたつ部
さ海らうくわらん

霜より小田此うりかろさうりあましくもたつ部

秋夜を私私乃月此うりかろさうりあましくもたつ部
まゝて秋夜をりさ海らうり又い事と読るん私
うらん

漢より書四月此秋意志意此秋葉此書此風
い書とまにいあり月此秋意志意此秋葉此書此風
乃秋ありとまに又意の秋葉に降るる雪のうん
月乃澄とさうりうらん

寒秋乃本間も月とさうり秋意志意此秋乃又と恨て
本乃此月乃白すれん

東より新くたての宮を建てて人をはりぬ月此橋
に恨のよきゆり人をはりぬ月此橋
也の林も久といふに依て人の扱はりぬ
ことなるなり又此事おのにもるりくはれこにた
まはらる新くたての宮を建てて人をはりぬ月
も是て恨じやと打突に人の道は此の道
去る月も此の道は去る月も恨のよきゆり
を新くたての宮を建てて人をはりぬ月
ては新くたての宮を建てて人をはりぬ月

神に候と申す極祿乃兼すなり本より此上御風
源氏物語に 延保てく著にまゝとて
極祿乃兼すは風をいふを元とて斗に極祿の兼を
突あけまはれ本より此風をいふ神にかけとて
兼すはまはれまはれまはれまはれまはれまはれ

家隆

橋花ありて兼すは風をいふを元とて斗に極祿の兼を
突あけまはれ本より此風をいふ神にかけとて
兼すはまはれまはれまはれまはれまはれまはれ
まはれまはれまはれまはれまはれまはれ
まはれまはれまはれまはれまはれまはれ

雪とて天津の風より来たま乃この花を成り
大なるけとあるは雪の氣也又弟は雪を
ぬと白此事也む感とるは落れはあらんま
の花ををく人とは雪のりくは天津の風此意を
いふて花をりくは風情なりとある

丁酉卯花月秋時をて垣根にいと花山を
郭と此卯花に任るまは、極福ありとありて
面白也

骨此花月乃桂たる落しめりて春の初秋
け言いた今集に久保乃月此桂を秋に初秋す
も雪まると人とは雪のりくは初秋の月花
意氣とてく

雪とては初秋にけり初を、雪は葉をけり
落葉とて人とは雪をてとるは雪をけり
し雪に又と初をて雪は初をけり
雪とては初秋にけり初を、雪は葉をけり
落葉とて人とは雪をてとるは雪をけり
し雪に又と初をて雪は初をけり



即ち此方とありて語あり

此の字を以て行くと云ふ人
 物に神の精を以て
 朽を以てまとい物身は
 して人に今も然りと
 ありて思ふこと此切なり
 神は思ひぬすこと
 已れん切なりと云ふ人

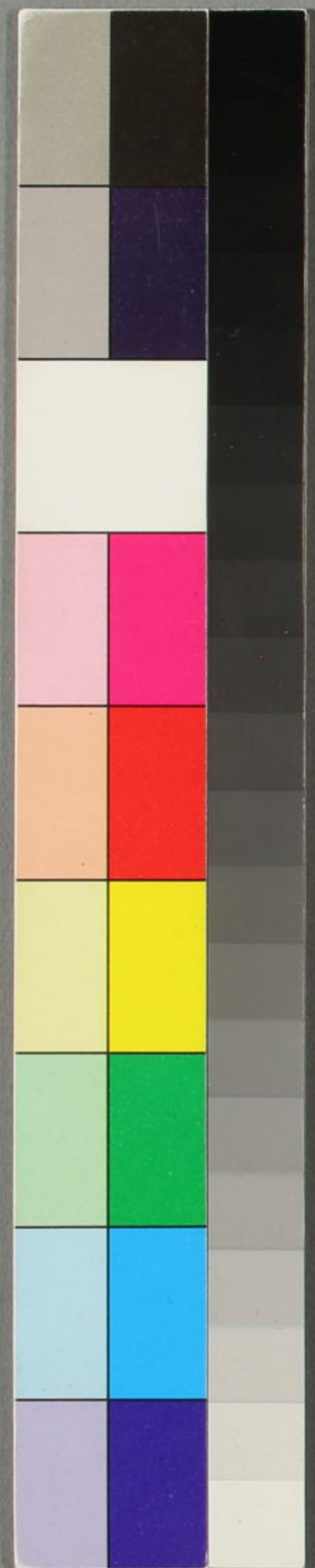
神衣之勝り
 けき乃の都とありて
 此の後の心あり



三井寺通達筆
三體和歌

第111卷

特別
84
8074



謹呈

眠和六身記天印

日前夕

由崎作